公開対談シリーズ第12回

NINAGAWA 千の目（まなざし）

2008年新年早々に颯爽と現れた藤原竜也さんには、実は「熱い決意」があった。俳優として演出家・蜷川幸雄に語る芝居の夢。『身毒丸』の2月アメリカ公演、3月本公演を前にした二人の会話は、大きな期待の光を新春の会場に差し込んだ。

（財）埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家　蜷川幸雄

×

俳優　藤原竜也

15歳の真っ白の『身毒丸』から10年、そして

蜷川（以下N）　どう、ここは久しぶりでしょう。

藤原（以下F）　久しぶりですね。明けましておめでとうございます。

N　おめでとう。しょっちゅう一緒にいるように思われるようですが、めったに一緒にいることもなくて、実は二人で話し合うことも割と少ないんです。

ちょっと痩せていますよね。何でそんなに痩せたの？

F　これは先週終わりましたが、『カメレオン』という映画を撮っていまして…。

N　さっき「どうしてそんなに痩せたんだ」と聞いたら、「『身毒丸』が始まるから」とまんまと嘘をつきやがって（笑い）。

F　でも、さっき蜷川さんは「おまえ、もうたらいに入れないだろう」と言っていましたからね。

N　15歳で藤原君はロンドンでデビューしました。覚えている？

ホテルの前に着いたら、竜也がバスから降りてきて「わあ、ロンドンだ、ロンドンだ」と言っていた（笑い）。ああ、伸びやかで単純でかわいいなと思っていました。そして、バービカンというロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが本拠地にしていたいい劇場で、彼は初舞台を踏みました。本当に希有な例です。懐かしいね。夢のようだね。

F　僕は今25歳で今年26歳になりますが、最初のこの『身毒丸』という作品と、蜷川さんという演出家と、白石加代子さんという共演者、その三つがなければ今は間違いなく続けてないと思うんです。やっぱり蜷川さんの演出というか思いが自分の中でもすべてでしたから、蜷川さんにその後教えてもらったことも山ほどありますが、『身毒丸』がなかったら僕は俳優として間違いなく間違った方向に進んでいると思う。今ここに立っていられることもないのではないかと感じます。ものすごく大きな出会いだったなと思いますね。今回はアメリカ公演もというのもありますし、改めて実は年明けから台本を読み出しましたが、『身毒丸』はすごく楽しみですね。

N　僕は昨日『身毒丸』のビデオを見たんだ。「え、こんなことを